

東京大學  
東洋文化研究所

要覽 昭和59年度

東京大学東洋文化研究所



6413042745

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE  
UNIVERSITY OF TOKYO

1984

C3

45

8



東京大学東洋文化研究所

# 東洋文化研究所要覧

## 目 次

|     |                  |    |
|-----|------------------|----|
| I   | 沿 革              | 1  |
| II  | 組 織              | 3  |
| III | 職 員              | 5  |
| IV  | 研究活動             | 8  |
|     | A 部門研究           | 8  |
|     | B 昭和 59 年度研究計画   | 19 |
|     | C 研究会・科学研究費による研究 | 29 |
|     | D 本学内教育参加        | 31 |
|     | E 外国出張           | 35 |
|     | 外国人研究員等・内地研究員    | 37 |
|     | F 研究報告           | 39 |
|     | G 個人研究業績         | 46 |
|     | H 図書・資料          | 66 |
| V   | 東洋学文献センター        | 72 |
|     | 〔付〕住所録           | 77 |
|     | 建物配置図            | 84 |
|     | 英文概要             | 89 |

# I 沿 革

本研究所は昭和 16 年 11 月 26 日、東洋文化の総合的研究を目的として、東京（帝国）大学に付置創設された。当初は哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の 3 部門で、総合図書館内に研究室、書庫、事務室を置いて発足した。昭和 24 年、新たに 3 部門が増設されたのを機会に組織を細分化し、哲学・宗教部門、文学・言語部門、歴史部門、美術史・考古学部門、法律・政治部門、経済・商業部門の 6 部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し、これまでの総合図書館内研究室を分室とし、研究の発展をはかった。

ついで昭和 26 年、人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが、アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するに伴い、地域区分を軸とした将来計画のもとで、従来の諸科学の専門体系による部門構成を、汎アジア経済部門、汎アジア人文地理学部門、汎アジア文化人類学部門、東アジア政治・法律部門、東アジア歴史部門、東アジア美術史・考古学部門、東アジア哲学・宗教部門、東アジア文学部門の 8 部門に再編成し、さらに地域部門の増設計画を立てた。そして昭和 35 年には南アジア政治・経済部門、昭和 39 年には東北アジア部門、昭和 43 年には西アジア歴史・文化部門、昭和 48 年には東南アジア経済・社会部門、昭和 53 年には西アジア政治・経済部門が増設されて、ようやく 13 部門を擁するに至った。

なお昭和 41 年には、東洋学に関する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サーヴィスを目的として、東洋学文

## I 沿 革

献センターが付属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら、しかし各専門分野の孤立を避け、アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために、合同の研究会、各種研究班によって学際的研究を育て、また研究陣容の補強を図るため、学内外の専門研究者に研究を委嘱し、協力を求める方針をとってきた。

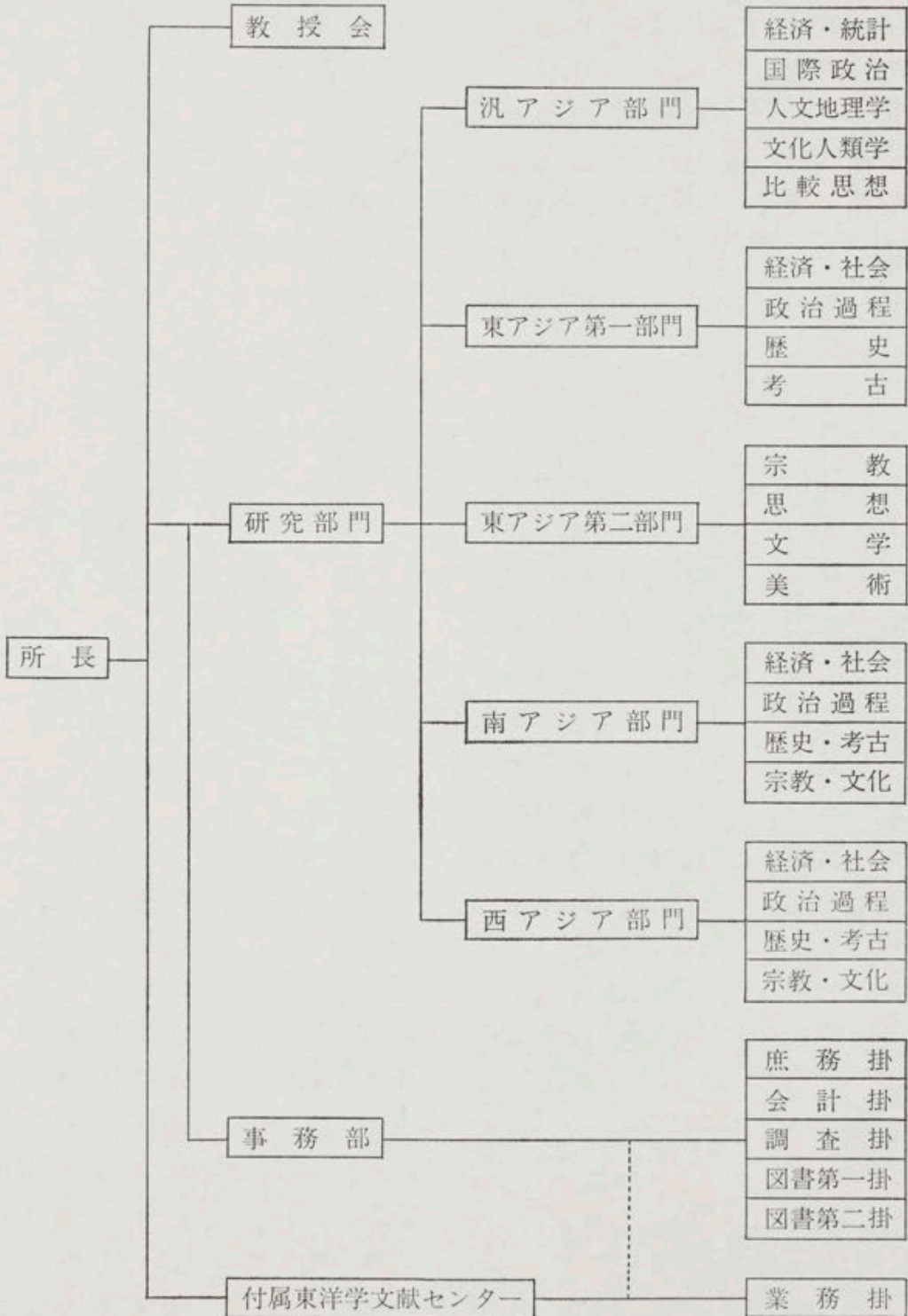
しかしながら、アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日、本研究所が、わが国のアジア研究の中核的、指導的役割を果たすためには、研究内容の充実、規模の拡大を含む組織上の再編成を行なう緊急の必要性に迫られ、昭和 56 年より新しい構想にもとづくいわゆる大部門制を採用し、これまでの 13 部門を、汎アジア部門、東アジア部門、南アジア部門、西アジア部門の 4 部門に統合し再出発することになった。

創立以来 23 年間にわたって、本研究所は総合図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが、昭和 39 年に、本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。昭和 39 年から昭和 42 年にかけて工事が行なわれて総合研究資料館との合同庁舎が完成し、5 階以上を本研究所が使用することになった。

しかし、研究組織の拡充、研究活動の多様化、図書・資料の増加などに伴い、狭隘な施設の改善、とくに書庫の緊急整備等の強い要望があり、昭和 52 年から施設整備の必要性を強調してきた。昭和 57 年に至ってこれが認められ、総合研究資料館との交換分合により、本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これに伴って全面的に改修工事を行ない、昭和 59 年 3 月に工事が完了した。

本研究所の総面積は 6,577 平方メートルで、地下 1 階、地上 8 階からなる。3 階までを所長室、事務室、図書室、東洋学文献センター、会議室、演習室等とし、4 階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から 8 階まで (2 階を除く) の北西部分 (約 1,800 平方メートル) は書庫にあてられている。

## II 組 織



## 歴代所長

| 氏名              | 在職期間                |
|-----------------|---------------------|
| 桑田 芳蔵           | 昭和16.11.26—18. 3.31 |
| 宇野 円空           | 18. 4. 1—21.10. 5   |
| 戸田 貞三           | 21.10. 6—22. 9.31   |
| 辻 直四郎           | 22.10. 1—29. 3.31   |
| 仁井田 陸           | 29. 4. 1—33. 7.10   |
| 飯塚 浩二           | 33. 7.11—35. 7. 9   |
| 結城 令聞           | 35. 7.10—37. 7. 9   |
| 江上 波夫           | 37. 7.10—39. 7. 9   |
| 飯塚 浩二           | 39. 7.10—40. 2.28   |
| 小口 偉一           | 40. 3. 1—41. 3.31   |
| 川野 重任           | 41. 4. 1—43. 3.31   |
| 小口 偉一           | 43. 4. 1—45. 3.31   |
| 泉 靖一            | 45. 4. 1—45.11.15   |
| 川野 重任<br>(事務取扱) | 45.11.16—45.12.17   |
| 鈴木 敬            | 45.12.18—47. 3.31   |
| 荒 松雄            | 47. 4. 1—48. 3.31   |
| 窪 徳忠            | 48. 4. 1—49. 3.31   |
| 佐伯 有一           | 49. 4. 1—51. 3.31   |
| 大野 盛雄           | 51. 4. 1—53. 3.31   |
| 深井 晋司           | 53. 4. 1—55. 3.31   |
| 中根 千枝           | 55. 4. 1—57. 3.31   |
| 大野 盛雄           | 57. 4. 1—59. 3.31   |
| 尾上 兼英           | 59. 4. 1—現在         |

## 名誉教授

| 氏名    | 称号授与年月  |
|-------|---------|
| 米沢 嘉圃 | 昭和 42.5 |
| 江上 波夫 | 42.5    |
| 小口 偉一 | 45.5    |
| 橋本 秀一 | 45.5    |
| 川野 重任 | 47.5    |
| 窪 徳忠  | 49.5    |
| 鈴木 敬  | 56.5    |
| 荒 松雄  | 57.5    |
| 佐伯 有一 | 58.5    |

## 歴代事務長

| 氏名    | 在職期間                |
|-------|---------------------|
| 山高 力三 | 昭和16.11.27—17. 9.30 |
| 根本 喜蔵 | 17.10. 1—19. 7. 9   |
| 長内太郎吉 | 19. 7.10—29. 7.15   |
| 工藤松之助 | 29. 7.16—38.10.31   |
| 宮本 健  | 38.11. 1—44. 2.28   |
| 新井 康次 | 44. 3. 1—49. 3.31   |
| 斎藤 益  | 49. 4. 1—52. 6.30   |
| 三浦 皓守 | 52. 7. 1—56. 3.31   |
| 伊東秀三郎 | 56. 4. 1—58. 3.31   |
| 岡部 藤男 | 58. 4. 1—現在         |

### III 職 員

|     |         |          |
|-----|---------|----------|
| 所 長 | 尾 上 兼 英 |          |
| 教 授 | 大 野 盛 雄 | 西アジア部門   |
| 教 授 | 中 根 千 枝 | 汎アジア部門   |
| 教 授 | 深 井 晋 司 | 西アジア部門   |
| 教 授 | 尾 上 兼 英 | 東アジア第二部門 |
| 教 授 | 関 寛 治   | 汎アジア部門   |
| 教 授 | 山 崎 利 男 | 南アジア部門   |
| 教 授 | 松 井 透   | 南アジア部門   |
| 教 授 | 鎌 田 茂 雄 | 東アジア第二部門 |
| 教 授 | 池 田 温   | 東アジア第一部門 |
| 教 授 | 山 田 三 郎 | 汎アジア部門   |
| 教 授 | 松 丸 道 雄 | 東アジア第一部門 |
| 教 授 | 田 仲 一 成 | 東アジア第二部門 |
| 教 授 | 戸 田 禎 佑 | 東アジア第二部門 |
| 教 授 | 友 杉 孝   | 汎アジア部門   |
| 助教授 | 松 谷 敏 雄 | 西アジア部門   |
| 助教授 | 蜂 屋 邦 夫 | 東アジア第二部門 |
| 助教授 | 猪 口 孝   | 汎アジア部門   |
| 助教授 | 原 洋之介   | 汎アジア部門   |
| 助教授 | 加 納 啓 良 | 南アジア部門   |
| 助教授 | 濱 下 武 志 | 東アジア第一部門 |
| 助教授 | 柳 澤 悠   | 南アジア部門   |



Ⅲ 職 員

|     |     |     |          |
|-----|-----|-----|----------|
| 助教授 | 鈴木  | 董   | 西アジア部門   |
| 助教授 | 宮 嶋 | 博 史 | 東アジア第一部門 |
| 助 手 | 加 藤 | 博   | 西アジア部門   |
| 助 手 | 清 水 | 展   | 汎アジア部門   |
| 助 手 | 久 保 | 亨   | 東アジア第一部門 |
| 助 手 | 福 井 | 清 一 | 汎アジア部門   |
| 助 手 | 上 田 | 信   | 東アジア第一部門 |
| 助 手 | 川 崎 | 有 三 | 汎アジア部門   |
| 助 手 | 谷   | 豊 信 | 東アジア第一部門 |
| 助 手 | 竹 中 | 千 春 | 南アジア部門   |

事務部

|       |     |     |
|-------|-----|-----|
| 事務長   | 岡 部 | 藤 男 |
| 総務主任  | 中 屋 | 俊 一 |
| 庶務掛   |     |     |
| 掛 長   | 道 鎮 | 正 雄 |
| 事務官   | 益 子 | 一 郎 |
| 〃     | 安 富 | 博   |
| 〃     | 大 熊 | 明 子 |
| 技 官   | 丸 山 | 勉   |
| 用務員   | 林   | 八重子 |
| 会計掛   |     |     |
| 掛 長   | 高 橋 | 長五郎 |
| 主任    | 岡   | 徹   |
| 事務官   | 吉 田 | 正   |
| 〃     | 山 本 | 日出夫 |
| 調査掛   |     |     |
| 事務官   | 結 城 | 剛 吉 |
| 〃     | 木 村 | 源 蔵 |
| 図書第一掛 |     |     |
| 掛 長   | 中 村 | 隆 治 |
| 事務官   | 中 村 | 摩利子 |

|              |     |     |
|--------------|-----|-----|
| 事務官          | 芳 賀 | 満 子 |
| 〃            | 新 居 | 弥 生 |
| 〃            | 吉 澤 | 秀 彦 |
| 図書第二掛        |     |     |
| 掛 長          | 松 山 | 靖 夫 |
| 事務官          | 工 藤 | 一 郎 |
| 〃            | 長 野 | 真   |
| 〃            | 笠 井 | 伊 里 |
| イラク・イラン遺跡調査室 |     |     |
| 技 官          | 古 山 | 学   |
| 〃            | 千代延 | 恵 正 |

東洋学文献センター

|        |     |     |     |
|--------|-----|-----|-----|
| センター長  | (併) | 尾 上 | 兼 英 |
| センター主任 | (併) | 関   | 寛 治 |
| 助 手    |     | 山之内 | 正 彦 |
| 業務掛長   |     | 中 里 | 富三男 |
| 事務官    |     | 畦 浦 | 美矢子 |
| 〃      |     | 神 田 | 百合枝 |
| 〃      |     | 渋谷  | 義 治 |

〔職員数〕(昭和 59 年 5 月 1 日現在)

教授 14 名 助教授 9 名 助手 9 名  
研究担当 26 名 研究協力 74 名  
事務官 25 名 技官 3 名 用務員 1 名

〔昭和 58 年度 教職員の異動等〕

(教官)

昭和 58. 4. 1 教授 佐伯有一 停年退職  
58. 5. 17 元教授 佐伯有一 名誉教授の称号授与  
58. 4. 1 友杉 孝 教授に採用  
" " " 柳澤 悠 助教授に採用  
" " " 鈴木 董 助教授に採用  
" " " 川崎有三 助手に採用  
" " " 講師 初見 昇 岐阜大学助教授昇任  
58. 9. 22 助手 持井康孝 辞職  
58. 10. 1 宮嶋博史 助教授に採用

(事務官)

58. 4. 1 事務長 伊東秀三郎 物性研究所総務課長に配置換  
" " " 海洋研究所経理課長 岡部藤男 事務長に配置換

## IV 研究活動

### A 部門研究

#### 汎アジア部門

教授 中根千枝, 関 寛治, 山田三郎, 友杉 孝  
助教授 猪口 孝, 原 洋之介, 助手 清水 展,  
福井清一, 川崎有三

汎アジア部門は、「アジア諸地域における社会・文化の変容過程」という研究課題のもとに、アジア諸地域の社会、政治、経済、文化に関する理論的・実証的研究をおこなっている。本部門の特徴のひとつは、他の部門が一定の地域を研究対象とするのに対して、本部門では文化人類学、政治学、経済学、人文地理学という社会科学の個別専門分野の理論と方法にも深くかかわっていることである。また、専門分野によっては日本も重要な研究対象にふくまれている。昭和 58 年 4 月下旬、本部門が組織して「アジア研究における社会科学の概念と方法に関する国際シンポジウム」を開催したことは、これらの特徴を最も端的に表わしている。

文化人類学研究分野は、アジア諸地域の社会・文化を対象とし、異なる社会構造を比較分析することに主眼をおいている。

中根は、前記の国際シンポジウムを組織するなど、アジア諸社会を深く

理解しうる社会科学の構築にむけての理論的研究をすすめている。インドを中心とした実態調査にもとづく研究につづき、文献資料を合せ用いてチベット社会の実態を考察し、近年はとくに中国のチベット系少数民族と漢民族の複合社会の研究をおこなっている。

清水は、フィリピンのネグリート族の実態調査にもとづき、狩猟採集から焼畑農耕、さらに定着農耕へと近年急激に変容しつつある社会の研究をおこなっている。研究の焦点は社会・経済構造の変化にあり、とくに結婚と婚資のシステムに注目し、贈与と交換の諸理論の検討も進めている。

川崎は、昭和 55～57 年に実施したマレーシアの潮州人漁村での調査にもとづき、東南アジアにおける漢人の村落の政治形態、儀礼、親族組織などの特色を探究している。

経済・統計研究分野は、アジア諸国の経済発展・農業発展の実証的な比較研究をおこなっており、この研究を通じて、欧米で提起・展開された経済発展論に替わりうるアジア社会に適した経済発展論もしくは農業発展論の構築を模索している。現在、班研究としてアジア諸国における農村開発の研究を進めているが、それと共に、アジア諸国経済・社会に関する基本的統計の集録と検討をおこなっている。

山田はアジア諸国経済発展の比較分析をおこなって経済発展の普遍性と地域特性を実証的に追求するとともに、とくに農業発展に関し、アジア諸国の生産性・生産構造の変化の実証的比較分析をおこない、日本の経済発展・農業発展の分析をもふまえて、アジアの経済発展、とくに農業発展についての分析を進めている。

原は研究対象としてインドネシア、ついでタイを取り上げ、とくに市場経済化が対象地域に固有の社会構造といかに接合できるかという問題に焦点をおきながら、経済発展の具体的な究明をおこなっている。それと同時に、東南アジア社会・経済の理論の検討をすすめ、この地域に固有の経済発展の型がありうるかどうかについて模索している。

#### IV 研究活動

福井は東南アジア農村における労働市場・土地市場の展開に焦点をあてて、経済理論が説く価格メカニズムと農民相互の社会的作用という非価格メカニズムとが相互にどう関連しているかを、理論的・実証的に明らかにしようとしている。

国際政治研究分野は、アジア諸国及び環太平洋諸国における政治変動と、それらの変動を内にかかえたアジア諸国間の国際関係の動きとの双方を、国際政治学・比較政治学の視点から明らかにすることを目標としている。この研究では、アメリカ・ソ連といったアジア地域外の国の分析はいうまでもなく、日米中ソ関係のような地球的規模の国際秩序の動的要因の解明も不可欠である。世界全体の国際関係の構造と過程の理解をまって、はじめてアジア地域の国際関係の動態がより鮮明に分析できるという視角から、研究の対象を引き続き拡大させつつある。

関は世界全体での国際関係の展開の分析を通じて、アジア環太平洋地域での「平和」を維持しうる国際関係の構造的・過程的特徴を明らかにする研究をおこなっている。とくに国連大学との協力で、世界の軍事化とそれを阻止する新しい発展の条件について、アジア諸国の実態に即して解明することに努めている。

猪口は世界政治経済の基本的構造過程の分析に従事し、アジア地域の国際関係に対して重要な影響を与える日本国内の政治経済の構図を分析している。とくに米国の研究者との共同研究をおこない、比較政治学の新動向を積極的に取り入れた研究に着手している。

人文地理学研究分野は、対象地域への長期間の住込み調査を通して、アジア諸地域の農村社会あるいは都市社会を全体的に把握する研究を課題とする。この研究では、社会科学の諸理論を安易に適用するのではなく、既存の社会科学の活性化を目指して実態調査の成果を意味づける方向を模索している。それと同時に、比較分析の視点もとり入れて、アジア社会を参照枠組にして、日本社会について再考することを意図している。

友杉はタイ農村社会の調査をおこない、社会を全体として把えようと試みた。経済的なものと非経済的なものとの関係性を分析し、ノモス、カオス、コスモスの3要素相互関連としてモデル化した。タイ農村社会に加えて、スリランカ地方都市社会の研究を始めている。この研究では、象徴の解釈を媒介として、社会の過去の出来事を現在そこに生きている記憶として、人文地理学の記述の中に再現することを考えている。

## 東アジア第一部門

教授 池田 温, 松丸道雄, 助教授 濱下武志,  
宮嶋博史, 助手 久保 亨, 上田 信, 谷 豊信

東アジア第一部門は、中国、朝鮮、日本、ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ、社会科学、歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を適確に把握することを目標とする。この研究では、とくに東アジア第二部門と協力して、学際的な地域研究による生きた全体像の把握をめざすことはいうまでもない。研究分野としては、経済、社会、政治、歴史、考古を包含し、「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として、共同研究を継続している。この部門では、「殷周時代の文物とその社会構造」「東アジア前近代官僚制の研究」「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」の3つの研究班を組織し、本学内外の研究者の協力を得て継続して研究をすすめている。

時代順に述べれば、考古学、古代史学の分野では、松丸は甲骨・金文資料の整理分析をおこない、本研究所蔵の甲骨を綴合の上で分類し、2,103片の写真と拓本を『甲骨文字 図版編』として刊行し、その釈文の作成と研究にあたっている。また国内外の殷周青銅器を実物について調査し、近年までに

#### IV 研究活動

蒐集した金文の写真資料のうち殷・西周のもの分類目録を刊行した。これらの基礎的作業を通じて、甲骨・金文の解釈や偽作問題につき新見解を発表し、その成果にもとづいて殷周時代の国家と社会構造を考究している。谷は東アジアの考古学を専攻し、中国や日本との比較において、朝鮮半島の初期の文化の解明を志している。

池田は中国古代・中世史と東アジア前近代の文化交流史を研究し、唐代に至る現存籍帳を集めて検討し、『中国古代籍帳研究』を刊行した。また文書が多く発見されている敦煌・吐魯番の社会の歴史研究、および仁井田陞『唐令拾遺』の増補のため編纂作業を進めている。笹山晴生を代表とする『続日本紀』の注釈の共同研究にも中国文献との関連の面から協力している。

明清以後現代に及ぶ問題については、上田は明清時代の社会史を専攻し、とくに江南社会の実態に迫るため、浙江省山間部を例として地域社会の定住経過、人口移動、宗教関係の変化などを細かく分析し、それを通じて地域史研究に新生面をひらきつつある。上田は南京大学歴史系に留学中であり、このように若い研究者が長期にわたり現地の大学に留学できるようになったことは、日本の学界の今後の進展に貢献するところ少なくないであろう。

濱下は 19 世紀を中心とする中国と欧米の経済関係の研究に従事し、海關資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき、貿易および金融問題の研究をすすめている。これに関連して、華人資本の海外活動の究明のため、香港・シンガポールなどで金融機関・商会の実地調査を実施した。また『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』を共編したほか、本研究所蔵の清代・民国初期地主文書の整理分析作業を継続しておこなっている。

久保は民国時代の経済史を専攻し、とくに財政、関税、幣制、労働問題などにつき統計資料の分析を進め、国民政府による関税政策決定過程について考察したほか、『中外経済周刊』『経済半月刊』『工商半月刊』3誌の記事目録を共編した。

宮嶋は朝鮮近代史を専攻し、土地調査事業を中心とした社会経済史の研究

を進めている。まず土地調査事業の実態に関する基礎的な研究をおこなうとともに、朝鮮史の時間的ひろがりの中でその意義を明らかにすべく、李朝時代の農業史や植民地期の地主制について考察し、さらに他の植民地・従属地域における土地変革との比較を通じて、土地調査事業を空間的ひろがりの中で位置づけることをめざしている。

## 東アジア第二部門

教授 尾上兼英, 鎌田茂雄, 田仲一成, 戸田禎佑  
助教授 蜂屋邦夫

東アジア第二部門は、中国を中心とする東アジア地域の思想、宗教、美術を研究対象とする部門で、とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として、各分野にわたって総合的に研究することを目的としている。

一般に中国では、権力エリートと文化エリートは分離せずに癒着しており、したがって権力エリートは文化を独占して、庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返しておこない、権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ、同時に強く意識されなかったにせよ、そこには反権力的な指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが、その状況はかなり複雑である。「庶民文化」は六朝期から唐末までに形成され、宋元以後にはめざましく発展し各地方に広がっていったと考えられる。この課題に対して、各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し、共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では、鎌田は中国仏教史の総合的理解をめざし、仏教の伝来から中国的仏教の成立に至るまでの歴史について、儒学・道教との関



#### IV 研究活動

係、庶民信仰と儀礼の面から再検討を加え、ついで隋唐仏教の研究をすすめている。それと同時に、中国仏教の実態の理解のため、中国・香港などの仏教寺院を継続して調査している。また韓国の仏教寺院についても調査をおこない、従来等閑視されてきた朝鮮仏教の重要性を明らかにして、その歴史を研究している。

蜂屋は六朝期を中心として儒仏道三教の思想とその間の交渉を研究している。思想の内在的理解のため文献の正確な読解に努めながら、とくに東晋時代の孫綽、戴逵、王坦之などの思想を検討し、また『太平経』やその他の道教資料を通じて庶民の側の思想についても考察している。さらに本学内外の専門家の参加を得て、『儀礼疏』の研究を推進し、「士冠疏」3巻の訳注を完成した。

次に文学の分野では、古来、稗官小説者流として蔑視された民間文学はエリートの正統文学に対立して存在していたが、六朝期以後、説話、歌謡などのジャンルを分岐させつつ、権力批判的指向の強い文学を形成していった。この流れは唐宋以後、質的には正統文学をむしろ凌ぐ勢で、戯曲・小説を展開させ、近世初期から近代に至る。文学研究分野ではこの展開過程を考察することを課題としている。

尾上は中国小説史を研究し、明清の白話小説の考察を中心に小説の源流をたどり、これと関連して明清以後の説書、説唱演芸の研究をすすめ、日本や東南アジアの華人社会の演芸・芸能の実態調査をもおこなっている。このほか、1930年代左翼文芸運動の総合的研究を所外の研究者とともに継続しておこなっている。

田仲は中国の地方演劇史を研究し、宋元より明清に至る地方演劇の記録を詳細に調べ、中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとしている。とくにこの数年来、香港、台湾、シンガポール、マレーシアの華人社会の演劇の調査を連続しておこない、文献資料との関連を考察している。別に元代戯曲の代表作『西廂記』について文献学と演劇史の両面からの研究を同学とともに継続し

ておこなっている。

美術史研究分野では、長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し、その写真資料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを刊行したので、その補足調査をおこなっている。戸田はこの基礎的作業を推進するとともに、宋元の羅漢十王図を中心とする仏画と元代道釈画を研究し、宋元絵画に表われた庶民的要素の意義を考察している。

## 南アジア部門

教授 山崎利男, 松井 透, 助教授 加納啓良,  
柳沢 悠, 助手 竹中千春

南アジア部門は、東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ、欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て、戦後にあいついで独立した諸国からなる地域であるので、今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため、本部門は政治、経済、社会、文化などにわたって過去・現在の両者を総合的に研究している。

本部門では、とくに「19～20 世紀の社会変動と民衆意識」を課題として研究を進めてきた。このため、所外の研究者の協力を得て研究班を組織し、それぞれ新しい角度から問題を提起し、それを実証的かつ理論的に検討をおこなっている。この研究の基礎的作業として、統計資料と法律資料の蒐集と整理、およびイギリス政府およびインド政府刊行の調査報告書のリストの作成をすすめている。

政治・法律研究分野では、山崎はイギリスのインド植民地支配のもとでの法制度の樹立・発展について研究している。この研究は、イギリス側の立法

#### IV 研究活動

経過、およびインド社会事情とインド人法律家・民族運動家などの対応を検討して、従来の法制史を再検討しようとするものである。また独立後のインド憲法とヒンドゥー法の歴史についても独立前の問題と関連して考察している。竹中は両大戦間のインド政治について研究し、イギリス側の体制に参加あるいは対立するインド諸政治組織の動態を分析している。

経済研究分野では、松井は19世紀後半から20世紀はじめにかけての北インドの経済史を研究し、詳細な統計資料から農業発展と農村生活の変化について考察を加えた。この研究では大量の統計データの処理が必要であり、その方法的基礎について検討した。この研究を拡大して、ガンジス流域での農業技術の進歩、農作物の商品化とその農村社会に与えた影響を研究している。イギリスのインド支配の理念についての研究から、さらに広く西欧のアジア社会の認識、アジア諸民族側の西欧文明の受容と反発などの諸問題を多角的に研究するため、班研究「近代世界におけるアジアとヨーロッパ」を推進している。

柳沢は、19世紀以後の南インド農村社会について、主として地稅関係公文書を資料として検討してきたが、近年南インドの一農村の現地調査をおこない、土地所有と農村内諸階層の変化を中心に、この120年間の歴史的变化を考察した。この農村を含む地区約100村の地稅査定台帳は農民の経済生活の多くの面を記録しているので、これと他の資料と合せて地域の経済と社会の変貌について研究している。

東南アジアに関しては、その複雑な社会の理解をめぐって、近年多くの理論が提出されている。松井は原、加納などとともにもこれらの理論の再検討のためシンポジウムを開き、その成果をまとめた。

加納はインドネシアの経済を研究し、ジャワ農村の現地調査をふまえて、土地所有、農業労働、労働移動に焦点をおいて、ジャワの農業発展と社会変容を考察している。これと関連して、植民地時代のジャワの経済史についても研究をすすめる。農村経済の調査報告書から統計資料の分析をおこなって

る。それと同時に、タイなどの東南アジア諸国の農村を訪れて、経済・社会構造の比較研究に関心を深めている。

## 西アジア部門

教授 大野盛雄, 深井晋司, 助教授 松谷敏雄,  
鈴木 董, 助手 加藤 博

西アジア部門は、アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域、いわゆる中近東を研究対象とし、あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握することが本部門の目標である。

西アジア地域は、古くから人類文明の発祥の地として、またその後の長い歴史過程における東西文化交流の結節点として、世界史上に重要な位置を占めてきた。同時に、世界の三大宗教と呼ばれるキリスト教、ユダヤ教、イスラム教などが生まれた地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし、広く諸地域に滲透して多大な影響を及ぼした。したがって、現在の世界の政治、経済、社会、文化にかかわる多角的な諸問題は、国際的見地からみても、とりわけ西アジア地域に現われているのである。本部門は以上の諸問題をいくつかの専門分野で共同に研究を推進している。

考古学・美術史学の分野では、松谷は農耕文化の発生から古代文明の形成に至る考古学的研究、深井は東西文化交流上重要な役割を果たしたイラン高原の遺跡の調査研究に従事している。深井と松谷は「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」を主宰して、イラク北部、テル・サラサート遺跡、イラン南部、マルヴ、ダシュト地方の諸遺跡、およびケルマンシャー地方のターク・イ・ブスターン遺跡の調査をおこない、すでに 20 冊の報告書を刊行し、そ

#### IV 研究活動

の続編を準備している。松谷はとくに初期農耕村落の成立とその文化について研究をすすめ、石器の性格や土器の編年など、この地域の考古学の諸問題の解明に努めている。深井はパルティア・ササン朝期のガラス、陶器、土器、彫刻について考察し、それと関連して、日本に現存するペルシア系遺品について検討をすすめている。

政治、経済、文化の研究分野では、研究所外の研究者の協力を得て、アラブ、イラン、トルコの各地域に分って研究を推進するとともに、西アジアのイスラム世界の総合的理解に努めている。

鈴木はオスマン帝国史を専攻し、政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して、軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに、実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から、現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察をおこなった。

加藤は19世紀エジプト経済史を研究し、オスマン帝国から独立化したムハマド＝アリー以後の農業政策と農村の経済・社会の変化を研究している。その重要な資料は土地所有に関する法令であって、それを逐一検討することによって、土地国有から農民の土地所有権の確立に至る過程の特質を明らかにした。引続いてカイロ大学に留学して、経済・社会史の諸問題を研究している。

大野はイラン、アフガニスタンの現地農村の実態調査に従事し、例えばイランのファールス県の農村、ヘイラーバードについては、現在まで20年間にわたる定点調査をおこなってきた。その目的はフィールドワークの方法にもとづいて、農民の生活実態から、国家権力と農村の関係、農村それ自体の社会経済構造を明らかにすることにある。また大野はこれと併行して、日本の山村の農民の生活についても定点調査を行ない、ある意味での比較考察を試みようとしている。

## B 昭和59年度研究計画

### 〔部門研究〕

汎アジア部門 アジア諸地域における社会・文化の変容過程

#### I. アジア諸社会の固有文化とその変容

1. 中根 千枝 漢蔵隣接地域における社会・文化の考察
2. 松谷 敏雄 アジアの先史時代における農耕村落の研究
3. 清水 展 アジアのネグリート社会の比較研究
4. 川崎 有三 東南アジアにおける中国系社会の研究

#### II. アジア諸国経済発展の比較研究

5. 山田 三郎 アジア諸国経済発展のメカニズムと地域的特性
6. 原 洋之介 アジア諸国の経済発展と労働市場
7. 福井 清一 アジア諸国の経済発展と企業内労働市場の形成

#### III. アジアにおける政治変動と国際関係

8. 関 寛治 世界軍事バランスの変動と太平洋・インド洋地域における紛争
9. 猪口 孝 西太平洋諸国における政治経済変動と対外政策

#### IV. アジアにおける農村社会構造の比較研究

10. 友杉 孝 東南アジアモンスーン地域
11. 大野 盛雄 西アジア乾燥地域

東アジア第一部門 東アジアにおける国家権力と社会経済機構

1. 松丸 道雄 中国古代国家の形成
2. 谷 豊信 東北アジア諸地域の国家形成

#### IV 研究活動

3. 池田 温 東アジア前近代国制の比較史
4. 上田 信 明清時代の社会経済構造
5. 濱下 武志 中国近代の経済発展
6. 久保 亨 民国時代の社会経済構造
7. 宮嶋 博史 近代朝鮮の社会経済構造

#### 東アジア第二部門 東アジアにおける庶民文化の形成と展開

1. 鎌田 茂雄 庶民信仰の宗教形態
2. 蜂屋 邦夫 庶民における三教思想の受容
3. 尾上 兼英 明清の説書・説唱演芸
4. 田仲 一成 明清の地方劇
5. 戸田 禎佑 宋元の民間画工

#### 南アジア部門 南アジアにおける支配体制と社会構造

1. 山崎 利男 古代インド社会の変貌
2. 柳沢 悠 近現代インドの経済構造
3. 竹中 千春 近現代インドの政治構造
4. 松井 透 イギリス植民地支配と南アジア社会
5. 加納 啓良 インドネシアにおける植民地支配と農業問題
6. 山田 三郎 東南アジア農業社会の比較研究
7. 原 洋之介 東南アジアの支配体制と経済発展
8. 辛島 昇 南インドにおける国家と社会

#### 西アジア部門 西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1. 大野 盛雄 西アジアの農村構造
2. 松谷 敏雄 北メソポタミアにおける農耕・牧畜の起源について
3. 深井 晋司 パルティア・ササン朝時代の墳墓の副葬に関する諸

## 問題

4. 中村広治郎 イスラムの倫理思想
5. 佐藤 次高 中世イスラム社会の研究
6. 鈴木 董 オスマン帝国における支配組織と支配エリートの研究
7. 加藤 博 近代エジプトの土地税制

## 〔班 研 究〕

### アジア諸社会における少数民族の伝統的社会組織とその変容過程

主任 中根

1. 中根 千枝 中国西北部蔵族社会の変容過程
2. 末成 道男 台湾原住民と漢人の接触過程
3. 川崎 有三 マレーシア中国系村落における文化変容
4. 清水 展 フィリピン・ネグリーの社会経済変容
5. 結城 史隆 フィリピン・ミンダナオ島焼畑耕作民の社会組織とその変容
6. 船曳 建夫 ヴァヌアツ内部の社会・文化の基礎的単位の存在様態と序列化

### アジア農村の現地研究の方法と過程 主任 大野

1. 大野 盛雄 生活様式論—イラン, アフガニスタン—
2. 宮口 侗廸 山村の構造—日本—
3. 友杉 孝 むらと水利—タイ—
4. 菱口 善美 村落と農業—インド, バングラデシュ—
5. 中村 尚司 共同体と水利—スリランカ—
6. 後藤 晃 灌漑農業論—西アジア—



#### IV 研究活動

##### アジア諸国における農村開発 主任 山田

1. 山田 三郎 アジア諸国の農村開発政策と農民の対応
2. 原 洋之介 アジア諸国の農村制度の経済分析
3. 福井 清一 アジア農村における土地、労働制度の比較研究
4. 荏開津典生 アジアの農産物価格政策と日本の経験
5. 田中 学 戦前期日本における土地改良事業と農村社会—アジア農村社会の開発との比較研究—
6. 加納 啓良 東南アジアの土地制度と農村開発
7. レ・タン・ギェップ 農村制度の経済理論
8. 本台 進 農村開発と部門間資源移動
9. 米倉 等 インドネシアの農村開発
10. 藤田 夏樹 アジア農村における労働市場の構造

##### アジアの安全保障とその国内的基盤 主任 猪口

1. 猪口 孝 アジア諸国の政治経済システム
2. 鴨 武彦 アジア・太平洋地域の相互依存
3. 関 寛治 アジアにおける平和設計とその国内的条件
4. 進藤 栄一 アジアの冷戦と同盟関係
5. 高木誠一郎 安全保障のアジア的特質
6. 薬師寺泰蔵 アジア諸国の政策決定過程
7. 山本 吉宣 東アジアの国際政治経済

##### アジアにおける国内政治と国際政治 主任 関

1. 関 寛治 インド洋地域における開発と紛争
2. 石井 明 中ソ関係とその国内的基盤
3. 石田千代子 国際システムの情報探索とシミュレーション
4. 板垣 雄三 イスラム社会運動と国際政治

5. 坂本 義和 世界秩序とイスラム的社会変革
6. 高柳 先男 ヨーロッパとアジアにおける安全保障の比較研究
7. 平野健一郎 日中関係とその国内政治的要因
8. 藤井 昇三 中国における軍部と政治
9. 森 利一 ソ連外交とインド洋世界
10. 山影 進 東南アジアにおける相互依存
11. 森山 茂徳 東北アジアの国際環境と日韓関係

植民地体制と農業の商業化 主任 松井

1. 濱下 武志 中国
2. 宮嶋 博史 朝鮮
3. 加納 啓良 インドネシア
4. 原 洋之介 タイ・マレーシア
5. 松井 透 北インド・ビルマ
6. 柳沢 悠 南インド
7. 友杉 孝 スリランカ
8. 加藤 博 エジプト

殷周時代の文物とその社会構造 主任 松丸

1. 松丸 道雄 殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2. 持井 康孝 窖藏青銅器から見た殷周時代の社会構造
3. 飯島 武次 殷周時代の玉器と青銅器との関わり
4. 量 博満 倣銅土器製作の社会的背景
5. 豊田 久 殷周出土文字資料から見た君主権の構造
6. 後藤 均平 殷周時代の出土遺物と都邑
7. 平勢 隆郎 殷文化と楚文化
8. 谷 豊信 殷周文化と東北古代文化

#### IV 研究活動

9. 小倉 芳彦 新出竹帛書と古典
10. 宇都木 章 出土遺物による殷周史再構の可能性

#### 六朝隋唐時代の思想と礼制 主任 蜂屋

1. 蜂屋 邦夫 六朝隋唐時代の儒家思想
2. 戸川 芳郎 経典解釈史からみた儀礼疏
3. 沢田多喜男 儀礼疏を通じてみた疏学の位置づけ
4. 高橋 忠彦 鄭玄三礼注と儀礼疏
5. 影山 輝国 白虎通義と儀礼疏
6. 丘山 新 仏典の翻訳と伝統思想
7. 末木文美士 六朝思想に与えた仏教の影響
8. 藤本 幸夫 朝鮮文献よりみた中国古代礼制

#### 中国仏教思想の形成過程 主任 鎌田

1. 蜂屋 邦夫 形成期の中国仏教思想
2. 福井 文雅 道経思想の形成と仏教
3. 平井 俊栄 三論思想の形成過程
4. 池田 魯参 天台思想の形成過程
5. 鎌田 茂雄 唐代仏教史の諸問題
6. 江島 恵教 中観思想の中国的変異
7. 袴谷 憲昭 唯識思想の中国的変異
8. 木村 清孝 華嚴思想の形成過程
9. 吉津 宜英 華嚴と禪との交流
10. 石井 修道 禪思想の形成過程
11. 菅野 博史 六朝思想における仏性思想

#### 東アジア前近代官僚制の研究 主任 池田

1. 松丸 道雄 殷周時代の政治機構
2. 太田 幸男 秦漢官吏支配の形成
3. 福井 重雅 漢代官吏登用制度の形成と構造
4. 尾形 勇 中国古代国家構造と官人支配
5. 池田 温 隋唐官人制の構造と特質
6. 佐竹 靖彦 宋元時代の官僚制度
7. 小口 彦太 中国伝統官僚制の解体
8. 武田 幸男 朝鮮古代官制の形成と展開
9. 西沢奈津子 職員令の構成と性格
10. 坂上 康俊 日本律令の構成と特質
11. 石上 英一 日本律令官制の形成と展開

中国戯曲小説研究 主任 田仲

1. 田仲 一成 『西廂記』諸注の研究
2. 青山 宏 『西廂記』語彙の研究
3. 尾上 兼英 『西廂記』と明代小説の比較研究
4. 菊田 正信 『西廂記』俗語の研究
5. 伝田 章 『西廂記』版本の研究
6. 平山 久雄 『西廂記』曲韻の研究
7. 吉川 良和 『西廂記』演出の研究

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究 主任 濱下

1. 濱下 武志 17世紀以降東アジア経済の展開—欧米の公私文書分析を含めて—
2. 岸本 美緒 明清期経済の動態と意識の構造
3. 上田 信 明清契約文書より見た社会関係
4. 寺田 浩明 明清期の契約法慣習の論理

#### IV 研究活動

5. 臼井佐知子 清末契約文書の社会経済史的分析
6. リンダ・グローヴ 民国時代公私文書より見た農村経済
7. 久保 亨 民国時代公私文書より見た経済構造
8. 宮嶋 博史 朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

#### 現存する中国絵画の包括的再検討と国内国外に於ける補足的調査

主任 戸田

1. 戸田 禎佑
2. 海老根聡郎
3. 嶋田 英誠
4. 関口 正之
5. 湊 信幸
6. 柳沢 孝
7. 小川 裕充

特に専門別の分担を定めず、本年は仏画  
に関する検討、調査を重点的に行なう。

#### 1930年代左翼文芸運動 主任 尾上

1. 尾上 兼英 左翼文芸運動における民間形式の発掘と継承
2. 芦田 肇 日本プロレタリア文芸理論と左翼文芸運動
3. 伊藤 虎丸 左翼文芸運動と郁達夫
4. 尾崎 文昭 北京文壇からみた上海の左翼文芸運動
5. 近藤 龍哉 左翼作家連盟東京支部
6. 佐治 俊彦 左翼作家連盟に影響をあたえた諸思潮
7. 新村 徹 左翼文芸運動における大衆化と通俗化
8. 丸山 昇 30年代左翼文芸運動における魯迅
9. 溝口 雄三 左翼文芸運動の思想史的背景

#### 19～20世紀南アジアにおける社会変動と民衆意識 主任 山崎

1. 山崎 利男 インドにおける知識階級と「社会改革」
2. 松井 透 北インドにおける社会構造と農業技術
3. 長崎 暢子 北インドにおける民衆意識と政治的行動
4. 古賀 正則 北インドにおける経済変動と下層民衆
5. 佐藤 宏 北インド米作地帯の経済変動と農民生活
6. 中里 成章 ベンガル農村における経済変動と下層民衆
7. 柳沢 悠 南インド農村における社会変動と下層民衆
8. 中村 平次 インド亜大陸における諸民族形成
9. 加納 啓良 インドネシアの社会変動と民衆意識
10. 古田 元夫 ヴェトナムにおける社会階層と民衆意識
11. 白石 昌也 ヴェトナム農村社会の変動と民族形成
12. 石井 米雄 タイの民族形成と伝統文化
13. 友杉 孝 タイの社会変動と伝統文化

近代世界におけるアジアとヨーロッパ 主任 松井

1. 濱下 武志 銀流通より見たヨーロッパとアジア
2. 川北 稔 イギリス工業化前史とアジア
3. 杉原 薫 世界市場へのアジアの統合
4. 山口 博一 イギリス帝国におけるエリート養成政策
5. 宮嶋 博史 植民地支配における日本とイギリス
6. 小西 鮎子 フランス人の中国観
7. 岡本 サエ 中国人のヨーロッパ観
8. 石井 米雄 タイにおける知識人の西欧思想受容
9. 山崎 利男 インドにおける伝統と植民地法
10. 松井 透 イギリス人の世界理解とインド支配
11. 鈴木 董 ヨーロッパにおけるオスマントルコ観の変遷

#### IV 研 究 活 動

アジアの宗教制度と儀礼 主任 山崎

1. 鎌田 茂雄 華人社会における仏教儀礼と習俗
2. 田仲 一成 道教儀礼と演劇
3. 中根 千枝 チベット社会における僧院の役割
4. 山崎 利男 ヒンドゥー寺院の財産管理

## C 研究会・科学研究費による研究（昭和58年度）

### 〔研究会〕

- |           |  |             |
|-----------|--|-------------|
| 4月25日～28日 | アジア研究における社会科学の概念と方法に関するシンポジウム                          | 中根千枝        |
| 5月19日     | アジアにおける社会科学の問題と展望<br>アジア研究における社会科学の方法・概念：<br>経済学を中心にして | 猪口孝<br>原洋之介 |
| 6月9日      | 前近代オスマン帝国の組織とエリート<br>——その形成と変容の過程——                    | 鈴木董         |
| 9月22日     | 民国期中国の貿易構造   | 久保亨         |
| 10月20日    | ジャワ農民農業における作物構成の地域的差<br>違と変容                           | 加納啓良        |
| 11月10日    | 明清間における小説観   | 尾上兼英        |
| 12月8日     | スリランカ地方都市社会論の試み<br>——商業活動の視点から——                       | 友杉孝         |

### 〔科学研究費による研究〕（昭和58年度）

#### 1. 中国契約文書及び私文書の歴史的研究

（一般研究B）（昭和58・59・60年度） 代表者 池田 温

本研究は、敦煌・吐魯番などに含まれる古代・中世の契約文書、日本や海外に現存する中国近世・近代の契約文書、及び民国期の企業関係文書を写真・コピーによって蒐集し、その解説・整理・研究をおこない、中国社会経



#### IV 研究活動

済史研究の基礎をつくることを目的とする。

#### 2. 東南アジアにおける中国伝統芸能の総合的調査研究

(海外学術調査 調査総括) 代表者 尾上兼英

東南アジア諸地域に定住する華人社会に現在も伝えられている祭祀に伴う伝統芸能の実態の調査、及びその主催団体(同族、同郷、同業)の関与のしかた、祭祀のもつ社会的機能について、文学、歴史学、宗教民族学、音楽学、経済史学の諸視点から観察調査し、近世中国の文献中に散見する記録と対照し、中国近世芸能史を復原・再構築をするとともに、移民史を含む華人社会の基盤を調査し、文化交渉史を明らかにすることを目的としている。

#### 3. 東南アジア米作農村経済の比較研究

——タイとインドネシア——

(海外学術調査 現地調査) 代表者 山田三郎

本調査の目的は、東南アジア諸国の中から、タイ、インドネシア两国をとりあげて、それぞれの国の米作地帯に位置している農村の経済状況及び農村経営に関して実態調査をおこなうことにある。とくに土地利用・労働力利用の制度を存立させている自然環境、人口、市場、技術等の諸要因を分析し、経済学にもとづく理論的解明をはかることを中心的課題とする。

## D 本学内教育参加

[昭和 58 年度]

### 1. 大 学 院

(氏 名) (専門課程) (講義題目)

#### (1) 人文科学研究科

|                 |           |           |
|-----------------|-----------|-----------|
| 尾 上 教 授         | 中国語中国文学   | 説唱文学研究    |
| 田 仲 教 授         | 中国語中国文学   | 西廂記       |
| 池 田 教 授         | 東洋史学      | 吐魯番文書研究   |
| (法学政治学研究科と合併講義) |           |           |
| 濱 下 助 教 授       | 東洋史学      | 中国近代經濟史研究 |
| 松 丸 教 授         | 東洋史学・中国哲学 | 殷周青銅器銘文研究 |
| 山 崎 教 授         | 東洋史学      | インド法制史研究  |
| 蜂 屋 助 教 授       | 中国哲学      | 曹魏時代の思想   |
| 鎌 田 教 授         | 印度哲学      | 中国仏教文献講読  |
| 戸 田 教 授         | 美術史学      | 中国絵画史研究   |
| 深 井 教 授         | 美術史学      | 西アジア美術史研究 |

#### (2) 法学政治学研究科

|           |     |             |
|-----------|-----|-------------|
| 関 教 授     | 政治学 | 環太平洋圏国際秩序研究 |
| 猪 口 助 教 授 | 政治学 | 政治経済学演習     |

#### (3) 社会学研究科

|           |       |             |
|-----------|-------|-------------|
| 松 井 教 授   | 国際関係論 | 歴史における数量的方法 |
| 加 納 助 教 授 | 国際関係論 | 東南アジアの経済と社会 |
| 中 根 教 授   | 文化人類学 | 社会構造の分析     |
| 松 谷 助 教 授 | 文化人類学 | メソポタミア先史学   |

#### (4) 理学系研究科

#### IV 研究活動

|      |     |              |
|------|-----|--------------|
| 大野教授 | 地理学 | 社会地理学特論（夏学期） |
| 〃    | 地理学 | 地誌学演習（冬学期）   |

##### （5）農学系研究科

|      |       |         |
|------|-------|---------|
| 山田教授 | 農業経済学 | 国際農業論特論 |
| 原助教授 | 農業経済学 | 国際農業論特論 |

##### （6）総合文化研究科

|      |        |            |
|------|--------|------------|
| 大野教授 | 地域文化研究 | 現代イスラム文化論他 |
|------|--------|------------|

## 2. 学部

（氏名） （学科） （講義題目）

##### （1）農学部

|      |       |      |
|------|-------|------|
| 原助教授 | 農業経済学 | 比較農業 |
|------|-------|------|

##### （2）教養学部

|       |      |           |
|-------|------|-----------|
| 大野教授  | 教養学科 | アジアの地理と民族 |
| 中根教授  | 教養学科 | 社会の構造     |
| 松井教授  | 教養学科 | 植民地論      |
| 山田教授  | 教養学科 | 経済発展      |
| 松谷助教授 | 教養学科 | 技術発達史     |
| 猪口助教授 | 教養学科 | 政治学       |
| 加納助教授 | 教養学科 | インドネシア語   |

### 〔昭和59年度〕

## 1. 大学院

（氏名） （専門課程） （講義題目）

##### （1）人文科学研究科

|      |         |         |
|------|---------|---------|
| 尾上教授 | 中国語中国文学 | 説唱文学研究  |
| 田仲教授 | 中国語中国文学 | 西廂記     |
| 池田教授 | 東洋史学    | 吐魯番文書研究 |

|         |           |           |
|---------|-----------|-----------|
| 濱下 助 教授 | 東洋史学      | 中国近代経済史研究 |
| 松 丸 教 授 | 東洋史学・中国哲学 | 殷周青銅器銘文研究 |
| 山 崎 教 授 | 東洋史学      | インド法制史研究  |
| 蜂屋 助 教授 | 中国哲学      | 西晋の思想     |
| 鎌 田 教 授 | 印度哲学      | 中国仏教文献講読  |
| 戸 田 教 授 | 美術史学      | 中国絵画史研究   |
| 深 井 教 授 | 美術史学      | ペルシア美術史演習 |

(2) 法学政治学研究科

|         |     |             |
|---------|-----|-------------|
| 関 教 授   | 政治学 | 環太平洋圏国際秩序研究 |
| 猪口 助 教授 | 政治学 | 政治経済分析      |

(3) 社会学研究科

|         |       |             |
|---------|-------|-------------|
| 松 井 教 授 | 国際関係論 | 歴史における数量的方法 |
| 加納 助 教授 | 国際関係論 | 東南アジアの経済と社会 |
| 中 根 教 授 | 文化人類学 | 社会構造の分析     |
| 松谷 助 教授 | 文化人類学 | メソポタミア先史学   |

(4) 理学系研究科

|         |     |         |
|---------|-----|---------|
| 大 野 教 授 | 地理学 | 地誌研究    |
| 友 杉 教 授 | 地理学 | 社会地理学特論 |

(5) 農学系研究科

|         |       |         |
|---------|-------|---------|
| 山 田 教 授 | 農業経済学 | 国際農業論特論 |
| 原 助 教授  | 農業経済学 | 国際農業論特論 |

(6) 総合文化研究科

|         |        |          |
|---------|--------|----------|
| 大 野 教 授 | 地域文化研究 | 現代イスラム論他 |
|---------|--------|----------|

2. 学 部

(氏 名) (学 科) (講義題目)

(1) 文学部

|         |      |       |
|---------|------|-------|
| 中 根 教 授 | 一般講義 | 文化人類学 |
|---------|------|-------|

#### IV 研究活動

|                 |      |           |
|-----------------|------|-----------|
| 山崎教授            | 東洋史学 | 東洋史学演習    |
| 戸田教授            | 美術史学 | 美術史学特殊講義  |
| (2) 教養学部        |      |           |
| 大野教授            | 教養学科 | アジアの地理と民族 |
| 中根教授            | 教養学科 | 社会の構造     |
| 中根教授            | 教養学科 | 文化人類学方法論  |
| 松井教授            | 教養学科 | 植民地研究     |
| 友杉教授            | 教養学科 | 世界地誌      |
| 松谷助教授           | 教養学科 | 先史時代の世界史  |
| 蜂屋助教授           | 一般教育 | 総合科目      |
| 猪口助教授           | 一般教育 | 政治学       |
| 原助教授            | 教養学科 | 経済発展      |
| 加納助教授           | 教養学科 | インドネシア語   |
| (3) 全学一般教育ゼミナール |      |           |
| 柳沢助教授           |      | 南インドの農村   |

## E 外国出張（昭和58年度）

| 氏名    | 出張先                                   | 期間                   | 目的   |
|-------|---------------------------------------|----------------------|--|
| 持井 康孝 | 中国                                    | 56. 9. 23～58. 9. 22  | 中国考古学研究及び語学研修  |
| 加藤 博  | エジプト                                  | 57. 12. 10～59. 9. 30 | 近代エジプト社会経済史研究  |
| 大野 盛雄 | イラン                                   | 58. 3. 18～58. 4. 10  | イラン農村調査  |
| 田仲 一成 | 台湾, 香港                                | 58. 3. 18～58. 4. 1   | 農村演劇に関する調査研究   |
| 松井 透  | スペイン, ポルトガル, 英国                       | 58. 3. 24～58. 5. 5   | 南アジアのイギリス支配期に関する資料調査・収集  |
| 田仲 一成 | 台湾                                    | 58. 4. 24～58. 5. 1   | 中国・韓国・日本文化関係研究会議   |
| 田仲 一成 | 香港                                    | 58. 5. 12～58. 5. 25  | 祭礼儀礼に関する調査研究   |
| 久保 亨  | 英国                                    | 58. 7. 4～58. 8. 5    | 民国時代の社会経済史に関する調査研究   |
| 猪口 孝  | 米国                                    | 58. 7. 24～58. 7. 30  | 日本経済社会の総合的再評価に関する研究会議出席  |
| 関 寛治  | スリランカ, 南ア共和国, ブラジル, 米国, 英国, ソ連, ハンガリー | 57. 7. 25～58. 9. 4   | 環太平洋圏の発展についての共同研究及び国連大学 GPIID ネットワーク会議, 国際平和研究学会出席並びに国際政治学に関する調査研究 |
| 中根 千枝 | 米国, カナダ                               | 58. 8. 3～58. 8. 26   | 第 11 回国際人類学民族学会議及び伝統と変化セミナー出席                                      |
| 鎌田 茂雄 | 中国, シンガポール, マレーシア, 台湾                 | 58. 8. 13～58. 9. 11  | 中国仏教に関する調査研究   |
| 田仲 一成 | シンガポール                                | 58. 8. 18～58. 8. 29  | シンガポール華僑の地方劇に関する調査   |
| 友杉 孝  | スリランカ, シンガポール                         | 58. 8. 31～58. 10. 30 | 東南アジアにおける地方都市社会の研究   |

IV 研究活動

|       |                              |                       |                              |
|-------|------------------------------|-----------------------|------------------------------|
| 猪口 孝  | インドネシア                       | 58. 9. 4~58. 9. 9     | アジア太平洋地域における発展・安定及び安全保障会議出席  |
| 原 洋之介 | タイ, バングラデシュ                  | 58. 9. 4~58. 9. 18    | 海外農林業開発方針基礎調査                |
| 上田 信  | 中国                           | 58. 9. 10~60. 7. 31   | 明・清期江南地域における地域社会構造の研究        |
| 中根 千枝 | 中国                           | 58. 9. 30~58. 10. 10  | 社会人類学に関する調査研究                |
| 関 寛治  | 米国                           | 58. 10. 22~58. 10. 29 | 仏教と平和へのリーダーシップ会議出席           |
| 鎌田 茂雄 | 韓国                           | 58. 10. 27~58. 10. 31 | 百済文化研究会議出席                   |
| 鎌田 茂雄 | 中国                           | 58. 11. 15~58. 11. 23 | 中国仏教に関する研究                   |
| 中根 千枝 | ブラジル, パラグアイ, アルゼンチン, ペルー, 米国 | 58. 11. 18~58. 12. 13 | 社会人類学に関する調査及び社会科学に関する国際会議出席  |
| 田仲 一成 | 香港, 台湾                       | 58. 11. 22~58. 12. 10 | 地方演劇及び演劇文献に関する調査研究           |
| 濱下 武志 | 香港                           | 58. 11. 22~58. 12. 21 | 香港における銀行史研究                  |
| 関 寛治  | フランス                         | 58. 12. 12~58. 12. 18 | ユネスコ国際会議「今日のカール・マルクス」出席      |
| 猪口 孝  | 米国                           | 58. 12. 12~59. 9. 30  | 先進工業国の政治経済問題(特に国際問題)に関する調査研究 |
| 福井 清一 | タイ, インドネシア                   | 58. 12. 28~59. 3. 9   | 東南アジア米作農村経済の比較研究—タイとインドネシア—  |
| 原 洋之介 | タイ                           | 59. 1. 4~59. 2. 17    | 同 上                          |
| 加納 啓良 | タイ, インドネシア                   | 59. 1. 14~59. 3. 18   | 同 上                          |
| 山田 三郎 | 同 上                          | 59. 2. 5~59. 3. 18    | 同 上                          |
| 松井 透  | インド, タイ                      | 59. 2. 9~59. 3. 9     | 北インド農村社会の研究                  |
| 田仲 一成 | 香港                           | 59. 2. 13~59. 2. 19   | 香港地方劇に関する調査研究                |

|       |    |                     |                         |
|-------|----|---------------------|-------------------------|
| 福井 清一 | タイ | 59. 3. 12~59. 4. 15 | タイ稲作農村における農業経済学に関する実態調査 |
| 田仲 一成 | 台湾 | 59. 3. 18~59. 3. 29 | 台湾地方劇調査                 |

外国人研究員等・内地研究員（昭和58年度）

〔外国人研究員等〕

| 氏名(国籍・現職)                          | 期 間                  | 研究課題                                 | 担当教官      |
|------------------------------------|----------------------|--------------------------------------|-----------|
| 譚 汝 謙<br>(中国 香港中文大学高級講師)           | 57. 6. 15~58. 5. 15  | 近代日本の中国研究及びその文化意義                    | 尾 上 教 授   |
| 金 敬 泰<br>(韓国 梨花女子大学校教授)            | 57. 8. 1~58. 7. 31   | 大韓帝国時期(1897~1910)の政治と経済              | 濱 下 助 教 授 |
| 胡 起 望<br>(中国 中央民族学院講師)             | 57. 12. 15~59. 6. 10 | 雲南少数民族誌ならびにその歴史                      | 中 根 教 授   |
| 索 文 清<br>(中国 中央民族学院講師)             | 57. 12. 15~59. 6. 10 | 雲南少数民族誌ならびにその歴史                      | 中 根 教 授   |
| 申 賢 淑<br>(韓国 東国大学校助教授)             | 58. 4. 1~59. 8. 31   | 日本仏教における韓国仏教思想史の反映                   | 鎌 田 教 授   |
| Jung-fang Tsai<br>(米国 メリーランド大学助教授) | 58. 5. 10~58. 6. 10  | 中国史上の香港—同盟罷業, 反乱, ボイコット運動 1884—1914— | 濱 下 助 教 授 |
| 張 存 武<br>(台湾 国立中央研究院近代史研究所研究員)     | 58. 5. 1~58. 9. 10   | 中国と朝鮮の開国                             | 池 田 教 授   |
| Amales Tripathi<br>(インド カルカッタ大学教授) | 58. 8. 17~58. 9. 15  | インド近代史研究                             | 山 崎 教 授   |
| 金 鴻 植<br>(韓国 ソウル大学校講師)             | 58. 11. 1~59. 4. 30  | 韓国中世史(高麗~李朝)に関する文献蒐集と調査              | 宮 嶋 助 教 授 |
| 姜 伯 勤<br>(中国 中山大学副教授)              | 59. 2. 1~60. 1. 31   | 敦煌, トゥルファンの都市経済とシルクロード               | 池 田 教 授   |
| 陳 榮 照<br>(シンガポール シンガポール大学高級講師)     | 59. 3. 15~59. 4. 24  | 宋代の行政, 社会及び経済組織                      | 田 仲 教 授   |



#### IV 研 究 活 動

〔内地研究員〕

笠原十九司（宇都宮大学教育学部助教授）

研究課題 近代中国・朝鮮関係の研究——1900～20年代を中心に——

担当教官 濱下助教授 期間 58. 9. 1～59. 2. 29

## F 研究報告

### 1. 東洋文化研究所紀要

#### 第 86 冊 (昭和 56 年 11 月) 創立 40 周年記念論集 I

- |  |       |
|--|-------|
| 日本菟儲の殷墟出土甲骨について                        | 松丸 道雄 |
| 殷墟西北岡出土の魚鼎と亜守鼎<br>——殷代青銅器研究試錐(一)——     | 持井 康孝 |
| 言尽意論と言不尽意論                             | 蜂屋 邦夫 |
| 覺洲鳩の華嚴宗史観                              | 鎌田 茂雄 |
| 中国歴代墓券略考                               | 池田 温  |
| 雲山図論——米友仁「雲山図巻」<br>(クリーヴランド美術館) について—— | 小川 裕充 |
| 劉松年の周辺                                 | 戸田 禎佑 |
| 明代白話小説ノート<br>——短篇小説・「三言」(二～一)——        | 尾上 兼英 |
| 清代の会館演劇について                            | 田仲 一成 |

#### 第 87 冊 (昭和 56 年 11 月) 創立 40 周年記念論集 II

- |  |       |
|--|-------|
| 最近我国に将来されたエラムの古代ガラス二点について                                  | 深井 晋司 |
| ガザーリーと論理学  | 中村廣治郎 |
| カフル・シュブラフール村の村方騒動<br>——19 世紀エジプトにおける私的土地所有権の確立と<br>イズバ農民—— | 加藤 博  |
| イラン農村の研究序説——ヘイラーバードの 17 年——                                | 大野 盛雄 |
| ジャワにおける水稻生産の地域構造<br>——1920 年と 1977 年の生産統計比較——              | 加納 啓良 |

IV 研究活動

- 越中ソ関係, 1964年—1980年——探索的分析—— 猪口 孝
- Mt. Pinatubo ネグリートの経済生活  
——定着犁耕農業プロジェクトの成否とその影響を中心  
として—— 清水 展
- 二者関係経済における労働市場の構造  
——タイ国工業化論序説—— 原 洋之介
- 経済発展における普遍性と地域特性  
——アジア諸国経済発展の比較, 1960—78年—— 山田 三郎
- ダライ政権をめぐるチベット貴族のネットワーク 中根 千枝
- 第88冊 (昭和57年3月) 創立40周年記念論集Ⅲ
- デリー=サルタナット末期のモスクとローディー支配層 荒 松雄
- 4—12世紀インドにおける村落享有の確認とその消滅 山崎 利男
- 桂——唐詩におけるその〈意味〉 山之内正彦
- 日清・日露戦間期における日韓関係の一側面  
——在日朝鮮人亡命者の処遇問題—— 森山 茂徳
- 日本・ASEAN 関係の現代国際政治における位相 関 寛治
- 英領期ベンガル農業統計研究 松井 透
- 再びサイド・ブロー=ブレイド・フレイクについて 松谷 敏雄
- 第89冊 (昭和57年9月)
- 釈華嚴教分記円通鈔の注釈的研究(二) 鎌田 茂雄
- 「北山録」訳注(三) 三教交渉史研究班
- 康熙年間の穀賤について——清初経済思想の一側面—— 岸本(中山)美緒
- 所謂大鳥, 大鳥卵に関する西アジア美術史的考察 田辺 勝美
- 第90冊 (昭和57年12月)
- スラカルタ 1919年——インドネシア民族主義と農民—— 白石 隆
- 先秦思想史研究一斑——孟子仁義説成立考—— 澤田多喜男
- 敦煌毛詩音残卷反切の研究(中の三) 平山 久雄

- 刈分小作制度の諸理論——東南アジアにおける「互惠的」  
 刈分小作制度の経済理論構策のために—— 福井 清一  
 タイ農村における労働雇用契約の形態 原 洋之介  
 第91冊 (昭和57年12月)  
 エジプトにおける私的土地所有権の確立 加藤 博  
 連横『台湾通史』卷三三「林占梅列伝」  
 ——道咸同期北部台湾の一豪紳—— 林 正子  
 漢訳般若經典における「自然」——「自然」考(二)—— 末木文美士  
 第92冊 (昭和58年7月)  
 ターク・イ・プスターン大洞帝王狩猟図浮彫再考 田辺 勝美  
 太平経における言辞文書——共・集・通の思想—— 蜂屋 邦夫  
 桂——唐詩におけるその〈意味〉補遺 山之内正彦  
 中国国民政府による関税政策決定過程の分析  
 ——1932—1934年—— 久保 亨  
 部門間交易条件の変化と農業における資本形成  
 ——日本と台湾の農業資本形成の比較—— 本台 進  
 物部茂卿琴学初探 吉川 良和  
 第93冊 (昭和58年11月)  
 漢代察举制度の研究  
 ——とくに制举における昇進の規準をめぐって—— 福井 重雅  
 田面田底慣行の法的性格  
 ——概念的な分析を中心として—— 寺田 浩明  
 19世紀末20世紀初頭のダッカ地方における土地市場の考察  
 ——地主制の展開との関連において—— 中里 成章  
 北タイ祖霊信仰覚え書 梶原 景昭  
 Kastom と Skul——ヴァヌアツ，マレクラ島の社会変化  
 に関する微視的検討と理論的考察—— 船曳 建夫

#### IV 研究活動

##### 同盟の力学

——ハノイ，北京，モスクワ，1964年～1980年——

猪口 孝

第94冊（昭和59年3月）

積華嚴教分記円通鈔の注釈的研究(三之一)

鎌田 茂雄

地域と宗族——浙江省山間部——

上田 信

珞巴族の社会組織和經濟生活

——西藏米林県博嘎爾部的実態調査——

索 文清

大瑤山盤瑤の社会組織

胡 起望

物部茂卿撰次《烏糸欄指法卷子》研究

吉川 良和

## 2. 東洋文化

第62号（昭和57年3月）特集六朝隋唐の道家道教と仏教

『老子』王弼注考察一斑

澤田多喜男

『黄庭内景経』試論

麥谷 邦夫

釈道安における仏教思想の形成と展開

松村 巧

劉宋における靈宝経の形成

小林 正美

六朝後半より隋唐初期に至る道家の自然説

中嶋 隆蔵

北周・道安『二教論』注釈

蜂屋 邦夫

司馬承禎『坐忘論』について

——唐代道教における修養論——

神塚 淑子

第63号（昭和58年3月）特集アジアの農村と農民

——地域研究の新しい視角を求めて——

東南アジア農村社会論——地域研究と經濟理論——

原 洋之介

変容するネグリート社会の苦悩

——ある若者のアモック事件をめぐって——

清水 展

ジャワ農村研究覚え書き——階級関係と地域構造——

加納 啓良

タイ農村社会における市場（いちば）とその多義性

|                                      |       |
|--------------------------------------|-------|
| ——比較経済体制論に向けて——                      | 友杉 孝  |
| 西アジア農業社会と共同所有——ムシャールと農業の諸制度——        | 後藤 晃  |
| 村騒動の一日——国王権力とマーレキと農民のあいだ——           | 大野 盛雄 |
| 近代エジプト農村社会研究のためのノート                  | 加藤 博  |
| 第64号 (昭和59年3月) 特集東南アジア社会論            |       |
| 「二重経済」と「農業インボリューション」を超えて             |       |
| ——「農民的自給生産」再考——                      | 加納 啓良 |
| ベトナム—インドシナの民族的諸相                     |       |
| ——エスニシティ論の視点から——                     | 古田 元夫 |
| 経済ナショナリズム論                           |       |
| ——タイ国の日本批判を事例として——                   | 原 洋之介 |
| 東南アジア農村社会論の最近の動向をめぐって                |       |
| ——モラル・エコノミー論とポリティカル・エコノミー<br>論を中心に—— | 白石 昌也 |
| 東南アジア第一次産品輸出経済の構造                    |       |
| ——世界資本主義論的視点からの一接近——                 | 杉原 薫  |

### 3. 東洋文化研究所研究報告

1. 仁井田 陞 『中国の農村家族』1952
2. 周藤 吉之 『中国土地制度史研究』1954
3. 泉 靖一・斎藤 廣志 『アマゾン その国土と日本人』1954
4. 大林 太良 『東南アジア大陸諸民族の親族組織』1955
5. 結城 令聞 『世親唯識の研究 上』1956
6. 関野 雄 『中国考古学研究』1956
7. 窪 徳忠 『庚申信仰』1956
8. 江上波夫他 『館址 東北地方における集落址の研究』1958
9. 仁井田 陞 『中国法制史研究 刑法』1959

#### IV 研究活動

10. 仁井田 陸 『中国法制史研究 土地法・取引法』 1960
11. 米沢 嘉圃 『中国絵画史研究』 1961
12. 結城 令聞 『唯識学典籍志』 1962
13. 仁井田 陸 『中国法制史研究 奴隸農奴法・家族村落法』 1962
14. 築島 謙三 『文化心理学基礎論』 1962
15. 窪 徳忠 『庚申信仰の研究 年譜篇』 1962
16. 仁井田 陸 『中国法制史研究 法と慣習・法と道德』 1964
17. 鎌田 茂雄 『中国華嚴思想史の研究』 1965
18. 江上 波夫 『アジア文化史研究 要説篇』 1965
19. 泉 靖一 『濟州島』 1966
20. 江上 波夫 『アジア文化史研究 論考篇』 1967
21. 鈴木 敬 『明代絵画史研究 浙派』 1968
22. 窪 徳忠 『庚申信仰の研究 島嶼篇』 1969
23. 中根 千枝 『家族の構造 社会人類学的分析』 1970
24. 窪 徳忠 『沖縄の習俗と信仰』 1971
25. 川野 重任 『農業発展の基礎条件』 1972
26. Nakamura Kojiro, *Ghazali on Prayer* 1973
27. 窪 徳忠 『増訂 沖縄の習俗と信仰』 1974
28. 鎌田 茂雄 『宗密教学の思想史的研究』 1975
29. 松井 透 『北インド農産物価格の史的研究, 1861~1921年』 1977
30. 荒 松雄 『インド史におけるイスラム聖廟 宗教権威と支配権力』 1977
31. 池田 温 『中国古代籍帳研究 概観・録文』 1979
32. 田仲 一成 『中国祭祀演劇研究』 1981
33. 松丸 道雄 『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字 図版篇』 1982

#### 4. 東洋文化研究所叢刊

- 鎌田 茂雄 『華嚴学研究資料集成』 1983  
鎌田 茂雄 『禪典籍内華嚴資料集成』 1984  
中根 千枝編 『*Social Sciences and Asia*』 1984  
蜂屋 邦夫編 『儀礼士冠疏』 1984

#### 5. イラク・イラン遺跡調査団報告

- 『テル・サラサート I』 1958, 『同 II』 1970, 『同 III』 1975, 『同 IV』 1981  
『マルブ・ダシュト I』 1962, 『同 II』 1962, 『同 III』 1973  
『ファハリアン I』 1963  
『西アジアの人類学的研究 I』 1963, 『同 II』 1968  
『ディラマン I』 1965, 『同 II』 1966, 『同 III』 1968, 『同 IV』 1971  
『ターク・イ・ブスターン I』 1969, 『同 II』 1972, 『同 III』 1983, 『同 IV』  
1984  
『ハリメジャン I』 1980, 『同 II』 1981

#### 6. インド遺跡調査団報告

- 『デリー：デリー諸王朝時代の建造物の研究』 第 I 卷 遺跡総目録 1967  
第 II 卷 墓建築 1969, 第 III 卷 水利施設 1970

#### 7. 東アジア部門美術研究分野報告

- 『中国絵画総合図録』 第一卷 アメリカ・カナダ篇 1982, 第二卷 東南  
アジア・ヨーロッパ篇 1982, 第三卷 日本篇 I 博物館 1983, 第四卷  
日本篇 II 寺院・個人 1983, 第五卷 総索引 1983



## G 個人研究業績

### 大野 盛雄

- 1967 『ネイシャープウルのエプラーヒーマーバードむらのモノグラフ』  
テヘラン大学社会科学研究所
- 1967 “On Socio-Economic Structure of Iranian Villages—with  
Special Reference to Deh—”, *The Developing Economies*,  
Vol. 3.
- 1971 『アフガニスタンの農村から——比較文化の視角と方法——』岩  
波書店
- 1971 『ペルシアの農村——むらの実態調査——』東京大学出版会
- 1974 『フィールドワークの思想——砂漠の農民像を求めて——』東京  
大学出版会
- 1977 「フィールドワークの誤謬——『遊牧から定着農耕へ』をめぐって  
——」『思想』632号 岩波書店
- 1981 「イラン農村の研究序説——ヘイラーバードの17年——」『紀要』  
87
- 1982 『イラン革命考察のために』（編著）アジア経済研究所
- 1983 「村騒動の一日——国王権力とマーレキと農民のあいだ——」『東  
洋文化』63号

### 中根 千枝

- 1962 “The Nayar Family in a Disintegrating Matrilineal System”,  
*International Journal of Comparative Sociology*, Vol. III, No. 1,  
E. J. Brill, Leiden.
- 1966 “A Plural Society in Sikkim—A Study of the Interrelations

of Lepchas, Bhotias and Nepalis”, Christoph von Fürer-Haimendorf ed., *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon*, Asia Publishing House, Bombay.

- 1967 *Kinship and Economic Organization in Rural Japan*, Monographs on Social Anthropology 32, London School of Economics, The Athlone Press, London.
- 1967 *Garo and Khasi: A Comparative Study in Matrilineal Systems*, Mouton & Co., Paris & The Hague.
- 1970 *Japanese Society*, Weidenfeld & Nicolson, and Penguin Books, London; University of California Press, Berkeley.
- 1970 『家族の構造——社会人類学的分析——』 東洋文化研究所
- 1973 「沖縄・本土・中国・韓国の同族・門中の比較」『沖縄の民族学研究』 日本民族学会
- 1980 「東南アジア的社会構造の特色——人間関係についての一試論——」『山本達郎博士古稀記念 東南アジア・インドの社会と文化』(下) 山川出版社
- 1981 「ダライ政権をめぐるチベット貴族のネットワーク」『紀要』 87
- 1982 *Labrang: A Study in the Field by Li An-che* (編) 東洋文化研究所 東洋学文献センター
- 1984 *Social Sciences and Asia* (Proceedings of Asian Symposium on Concepts and Methods in Social Sciences, April 25-28, 1983, Tokyo.) (編) 東洋文化研究所

#### 深井 晋司

- 1979 「スーサ出土の彩釉煉瓦断片に見られる彩釉の技法とその化学分析について」『日本オリエント学会創立 25 周年記念オリエント学論集』 刀水書房